

平成 20 年 3 月期 第 3 四半期（累計）決算についての補足説明

当社（東京都千代田区外神田 4 丁目 14 番 1 号、資本金 364 億円、社長：河野 正樹）の平成 20 年 3 月期 第 3 四半期（累計）の連結決算は、売上高 3,527 億円、営業利益 340 億円、経常利益 345 億円、四半期（累計）純利益 173 億円となりました。また、連結総資産は 3,773 億円、連結自己資本は 1,477 億円、連結自己資本比率は 37.6%となりました。

前年同期比で、主要メタル価格は銅、亜鉛、インジウムの価格が下期に入り大幅に下落しましたが、一方で金、銀、白金族の価格が上昇し、また、携帯電話などの情報技術（IT）関連製品が堅調に推移したほか、環境・リサイクル関連競争がますます激化しつつも緩やかに拡大を続けております。これらにより、売上高は 135 億円（+4.0%）の増収となりました。

営業利益は、それぞれのセグメントで事業拡大のための積極的な設備投資が進むなかで、減価償却費の負担増や新規事業の研究開発費の増加により、28 億円（△7.8%）の減益となりました。経常利益は、上記に加え持分法適用会社が操業トラブルなどで減益となった影響で、32 億円（△8.6%）の減益となりました。

なお、第 3 四半期累計（当期）純利益は、前年同期は特別利益で固定資産の売却益がありましたが、今期はそれがなかったことにより、60 億円（△26.0%）の減益となりました。

財務面では、前年度末と比較し総資産は 250 億円増加しました。これは、事業拡大のための積極的な投資を実施したことにより有形固定資産が 155 億円増加したこと、また、リサイクル原料対応型の新炉の本格稼動に備え、一時的に原材料を増加させたほか、土壌処理の仕掛工事の増加などにより棚卸資産が 102 億円増加したことによるものであります。

なお、有利子負債は、前年度末から 210 億円増加し、1,358 億円の残高となりました。

1. セグメント別

製錬部門

製錬部門では、主要メタル価格は、銅、亜鉛、インジウムの価格が下期に入り大きく下落しました。一方、金、銀の価格は投機資金の流入などにより高水準で推移しました。販売量は、金、銅、白金族が販売量を伸ばし、亜鉛は建材向けに販売が減少しているものの、自動車めっき鋼板向けに販売量が増加し、総量では販売量を伸ばしました。

収益面では、銅、白金族は増販により増益となりましたが、亜鉛は価格の急激な下落のため原材料の先入先出による循環的な影響により減益となり、また、インジウムも鉱石原料中の品位の低下、価格下落により減益となりました。

以上により、製錬部門の売上高は前年同期並みの 207,497 百万円となりましたが、営業利益は前年同期比 955 百万円減益（△4.9%）の 18,612 百万円となりました。

環境・リサイクル部門

環境・リサイクル部門では、廃棄物処理は堅調に推移し、また、リサイクル原料の集荷や自動車シュレッダーダストの処理量、貴金属の回収量を増やしました。

収益面では、前年同期はメタル価格の高騰による恩恵がありましたが、今期はそれが縮小したこと、また、前年同期に比べ土壌浄化処理の大型案件が少なかったことにより収益は減少しました。

以上により、環境・リサイクル部門の売上高は前年同期比 3,905 百万円増収 (+7.1%) の 59,133 百万円となりましたが、営業利益は 221 百万円減益 (△3.9%) の 5,395 百万円となりました。

電子材料部門

電子材料部門では、携帯電話やパソコンに利用されるガリウムヒ素ウェハとLEDが堅調に推移したほか、鉄粉、キャリア粉が販売量を伸ばし、また、PDP (プラズマ ディスプレイ パネル) 用途向け銀粉も、下期に入りユーザーの在庫調整が一段落したのを受け、販売量を伸ばしました。一方フェライト粉やそのほか一部の製品で販売量が減少しました。

以上により、電子材料部門の売上高は前年同期比 2,860 百万円増収 (+6.7%) の 45,330 百万円となりましたが、営業利益は 329 百万円減益 (△6.1%) の 5,067 百万円となりました。

金属加工部門

金属加工部門では、自動車用途が引き続き好調で、銅合金板条、錫めっき品、貴金属めっき、セラミックス基板ともに販売を伸ばしました。

一方、収益面では下期に入り操業は順調で銅合金板条、錫めっき品の生産量を伸ばしておりますが、上期の増強設備の立上げ遅れによる生産量の伸び悩みや、銅価格の下落による原材料の先入先出法の影響に加え、貴金属めっきラインの増設などの投資による償却費の負担増もあって収益は減少しました。

以上により、金属加工部門の売上高は前年同期比 8,882 百万円増収 (+15.1%) の 67,661 百万円となりましたが、営業利益は 1,616 百万円減益 (△46.0%) の 1,896 百万円となりました。

なお、当第3四半期において、ヤマハ㈱の子会社である伸銅品の製造・販売会社 ヤマハメタニクス㈱の株式を 90%取得し、DOWA メタニクス㈱に社名変更し、新たに連結会社に加えております。また、同様に伸銅品の販売会社 ヤマハ・オーリンメタル㈱の株式を 50%取得し、DOWA オーリンメタル㈱に社名変更し、新たに持分法適用会社に加えております。

熱処理部門

熱処理部門では、工業炉は、炉の販売とメンテナンス工事ともに堅調に推移しましたが、熱処理加工では低調な国内自動車販売の影響を受け、また、国内、北米ともに自動車二輪車の生産減により、ギアなど機械部品の表面処理加工の受託が減少しました。

熱処理加工の受託減に加え、中京半田地区の設備増強による償却費の負担増、関東地区の新工場建設に伴う一時的なコストの増加により収益は減少しました。

以上により、熱処理部門の売上高は前年同期比 1,654 百万円増収 (+9.0%) の 20,042 百万円となりましたが、営業利益は 458 百万円減益 (△17.9%) の 2,103 百万円となりました。

単位：億円

連結決算	A	B	増減 (B - A)	
	2006年度第3Q (累計)	2007年度第3Q (累計)	金額	率
売上高	3,391	3,527	135	+4.0%
営業利益	369	340	△28	△7.8%
経常利益	377	345	△32	△8.6%
当期利益	234	173	△60	△26.0%

セグメント別 損益状況

単位：億円

	2006年度第3Q (累計)			2007年度第3Q (累計)			増 減		
	売上高	営業利益	経常利益	売上高	営業利益	経常利益	売上高	営業利益	経常利益
製 錬	2,077.7	195.7	195.6	2,075.0	186.1	192.8	△2.8	△9.6	△2.8
環境・リサイクル	552.3	56.2	58.1	591.3	54.0	52.6	39.1	△2.2	△5.5
電子材料	424.7	54.0	52.3	453.3	50.7	49.5	28.6	△3.3	△2.8
金属加工	587.8	35.1	33.9	676.6	19.0	17.4	88.8	△16.2	△16.5
熱処理	183.9	25.6	25.1	200.4	21.0	20.8	16.5	△4.6	△4.3
消去ほか	△434.5	3.2	12.7	△469.5	10.1	12.1	△35.0	6.9	△0.6
合計	3,391.9	369.8	377.7	3,527.2	340.9	345.2	135.3	△28.9	△32.6

2. 通期見通し

事業環境としては、原油価格の高騰や世界をリードする米国経済ならびに中国経済の動向が不透明であることなど、景気回復に向けて予断を許さない状況にあります。

また、前回予想した下期の主要メタル価格に対し、足下、亜鉛、インジウムの価格下落が続いており、収益を減少させる要因となっております。

このような状況のなか、現在グループ全体で推し進めている製造コスト、販売管理部門の徹底したコスト削減、生産性向上の緊急対策を着実に実施し、業績予想の達成に向けて全力を尽くしていく所存であります。

通期の業績予想としては、前回の予想どおり、売上高 4,400 億円、営業利益 460 億円、経常利益 460 億円、当期純利益 220 億円を見込んでおります。

なお、個別業績予想につきましても、前回予想どおり 売上高 145 億円、営業利益 95 億円、経常利益 105 億円、当期純利益 75 億円を予想しております。

《連絡先》 DOWA ホールディングス 経理・財務部門 03-6847-1150 成田、菅原
 ” 企画・広報部門 03-6847-1106 富川、鎌倉

以上